

知レヌカ、獨逸ノ行動力之レヲ促進サセタコトハ敢テ云フヲ待タヌ、獨逸カ其一般政策上ノ見地カラ東部國境ノ脅威ヲ滅殺スル爲露國ノ極東進出ヲ希望シ、又其進出ヲ或程度迄誘掖煽動シタノニハ相違ナイカ、三國干涉前後ニ於ケル獨逸ノ策動ハ、主トシテ自家領土慾ノ達成ヲ基幹トシテ案梅サレタト見ルノカ至當タト考ヘル。

## 第十二章 英國ノ極東政策

日清戰後ノ日英關係——日英同盟ノ機動ト其消散

大分長ク獨逸ヲ中心トシテ極東問題ヲ話シタカ、今度ハ英國ヲ中心トシテ研究シテ見ヨウト思フ。如何ナル國テモ其利益ヲ度外視シテ外交政策ヲ樹テルコトハ斷シテ無イカラ、一國ノ外交方針ハ極端ナ言葉ヲ用キレハ利己主義ヲ基幹トシテハ居ルカ、之レヲ露骨ニ標榜シ輿論ノ惡感ヲ購フ様ナコトヲスルノハ、拙劣ナ外交ヲ多クノ敵ヲ作り、之レヲ鋒鏑ニ現ハサス世相ニ迎合シ又他國トノ利害ヲ考察按配シテ善處スレハ、其ノ外交ハ世論ノ贊同ヲ博シ好結果ヲ收メ得ルノテ、古今ヲ問ハス洋ノ東西ヲ論セス自國ノ利益ヲ無視シタ外交ノ在ル筈ハ無イノタカラ、二國間ノ話合ヒハ相互ノ利益カ一致スルカ又ハ一方カ多少其利益ヲ犠牲トスルモ之レニ代ハル他ノ利益ヲ收メ得ルノテ無ケレハ纏マル譯ハナイ。日本ト英國トノ關係ニ就テ見ルニ日清戰爭ノ中頃迄、英國官民ノ態度殊ニ其極東艦隊司令官ノ態度ハ決シテ我國ニ好意的ヲ在ツタトハ思ヘヌ。夫レカ三國干涉ニ加ハラナカツタノテ、我輿論ハ之レヲ德トシ親善的トナツタカ、英國カ干涉不參加ニ決シタ原因ハ前ニ述ヘタ通りテ、我國ニ對スル好意カラ採算シタ點ハ殆ント無イト云フテ良イ。然シ日本カラ見レハ英國ノ此態度ハ確カニ我國ヲ八方塞リカラ救ツタニ相違ナキ故、之レヲ感謝スルノハ尤ナコトテ、利害ノ一致點ハ正ニ此間ニ見出タサレルノテアル。換言スレハ英國モ亦日本ト同シク清國ノ領土ヲ保全シ其門戸ヲ開

放シ機會均等主義ヲ確立スルノカ利益タカラ、兩國共同ノ目標ハ自然露國ノ野望ヲ制肘スルノニ集注サレルコトト成ツタ、副總理ノ資格ヲ殖民大臣トシテ入閣シテ居タ「チェンバレン」氏ハ明治三十一年三月中旬加藤公使ニ對シテ、英國ハ清國ノ領土保全ヲ欲スルカ、滿洲ヲ露國ニ對抗スル陸兵ヲ持タヌ、日英兩國ハ互ニ利益一致シ提携共ニ事ヲ爲シ得ル地位ニ在ルノニ、日本カラ未タ何ノ申込モ無イノハ不思議タ、兩國ハ胸襟ヲ開イテ互ノ意思ヲ徹底サセテ了解スルノカ必要ト思フ、ト語ツタ、間モ無ク威海衛租借ノ話カ始マリ、露國カラ露日聯合シテ英國ノ同地占領ヲ妨害シ様ト申込テ來タカ、我國ハ之レヲ斷ハリ、英國ノ租借ニ同意シタノミナラス兵舍其他ノ建築物等迄モ現狀ノ儘引渡シタノテ、兩國ノ關係ハ更ニ親善ヲ加フルニ至ツタ。其後北清事變ハ露國ノ滿洲ニ於ケル野心ヲ益々露骨ナラシメタノテ、遂ニ日英兩國ハ堅ク握手シタカ、日英同盟成立ノ根幹カ斯クノ如キ事情ニ基イテ居ルノタカラ、露國ニ對スル危惧カ消散スルノ日ハ他ニ何カ之レニ代ルヘキ事情ノ起ラヌ限り、日英同盟ハ不用ト成ル時テ、明治四十四年第三回目ノ同盟更新ノ際英國カ甚タ氣乗り薄テ在ツタノハ事態當然ノ譯合テアルカ、然シ此時ニハ獨逸カ盛ンシ活動シテ居タカラ、英國トシテハ未タ之レヲ續ケテ置ク方カ幾ラカ増シタツタ。元來英國ハ最初カラ米國關係ノ事柄迄モ同盟ノ目標内ニ加エル意思ハ毫頭無カツタノニ、其後日米關係カ世ノ中ニ論議サレル様ニ成ツタ爲、相當神經ヲ惱マシ、其結果第三回目ノ同盟協約ニハ總括的仲裁々判條約ヲ締約國中ノ一カ結ンタ國ニ對シ他ノ締約國カ戰爭スルモ援助義務ヲ負ハヌト云フ第四條カ追加サレタカ、將ニ結ハレントシテ居タ英米總括的仲裁々判條約ハ不成立ト成ツタノテ、英國ニ取ツテ甚タ具合力惡ルタ、又世界戰爭ノ結果獨逸ニ對スル危惧モ消散シタノ

テ、遂ニ第四目ノ更新ハセラレスニ終ツタ、只其態度カ餘リ上出來テ無カツタ爲我國ノ輿論ニ不快ノ感ヲ與ヘタノハ頗ル遺憾テアルカ、斯クノ如キ容易ニ豫見シ得ヘキ事理ヲ最後ノ瞬間迄無爲ニ傍視シテ居テ、國家ノ面子ヲ損ハス國民ヲ領得サセル爲ノ何等ノ措置ヲモ相當時期ニ講シナカツタ我輩ケ關ニ對シテモ、批判ノ餘地カアル様ニ思ハレル。

#### 支那ノ領土保全及門戶開放ニ關スル英獨協定

明治三十三年十月十六日倫敦テ調印サレタ英獨協定ノ正文ハ、條約集ニハ皆出テ居ルカ、茲ニ再録スル方カ讀者ノ便宜タト考エルカラ左ニ之レヲ掲ケル。

獨逸帝國政府及大不列顛皇帝陛下ノ政府ハ、清國ニ於ケル其利益及現行條約上ノ權利ヲ保持セムコトヲ希望シ、同國ニ於ケル其相互ノ政策ニ關シ、左ノ主義ヲ守ルヘキコトヲ約ス。

第一、清國ノ河川及沿海ノ諸港ヲ何國ノ差別ナク、總テ其國民ノ貿易及其他各種正當ノ經濟的活動ニ對シ自由開放シ置クハ、列國ニ共通スル永久ノ利益ナリトス、依テ右兩國政府ハ苟モ其勢力ヲ及ホシ得ル限り、總テノ清國領土ニ對シ此主義ヲ守ルヘキコトヲ約ス。

第二、獨逸帝國政府及大不列顛皇帝陛下ノ政府ハ、現下ノ紛擾ヲ利用シテ其自己ノ爲、清國版圖内ニ於テ何等領土上ノ利益ヲ獲得セサルヘク、且其政策ヲシテ清國領土ノ狀態ヲ變セスシテ維持スルノ方針ニ向ハシムヘシ。

第三、他ノ列國ニテ清國現下ノ紛擾ヲ利用シテ、形式ノ如何ニ拘ラス領土上ノ利益ヲ獲得セムトスルトキハ、右兩締約國ハ清國ニ於ケル其自國利益ヲ保護スル爲、追テ執ルコトアルヘキ措置ニ關シテ豫メ協商ヲ遂クヘキコトヲ保留ス。

第四、右兩國政府ハ他ノ關係列國殊ニ埃地利洪牙利國、佛蘭西國、伊太利國、日本國、露西亞國及亞米利加合衆國ニ本協定ヲ通知シ、之レニ記載セル主義ヲ認容セムコトヲ勸誘スヘシ。

#### 日 本 ノ 加 入

英國政府ハ同年十月二十四日其在京代理公使ヲ介シテ、前記第四ノ規定ニ基キ我政府ニ該協定ノ正文ヲ通知スルト同時ニ、「右協定ニ記載ノ主義ニ同意ナルヤ否ヤ回答ニ接セムコトヲ希望ス」ル旨ノ公文ヲ送ツタ、加藤外相ハ此主義承認ノ勸誘ニ對シ寧ロ進ンテ加入スルヲ得策ト認メ加入ノ結果如何ニ關スル質疑ヲ爲シ、満足ノ返事ヲ得タカラ、十月二十九日左ノ回答ヲ發シク。

帝國政府ハ右協定ニ加入スル以上ハ、之レニ對スル關係上帝國政府力加入國ノ代リニ締約國タリシ場合ニ於ケルト同一ノ地位ニ置カルヘキ旨ノ證言ヲ兩締約國ヨリ受取りタルヲ以テ、右協定ニ加入シ其協定ニ載スル所ノ主義ヲ受認スル旨、確然聲言スルヲ躊躇セス。

#### 各 國 ノ 態 度

埃、佛、伊三國ハ無留保贊同ノ意ヲ表シ、米國ハ第一、第二ニハ贊成シタカ第三ニハ英獨間ノ取極ニ過キヌモノテアルカラ何等意見ヲ表明スルノ必要ヲ認メスト回答シ、ソシテ本協定ニ對シ我國以外最モ利害ノ關係深キ露國ノ返事ハ左ノ通りテアル。

露國政府ノ所見ニテハ本協定ハ清國現在ノ事態ニ對シ、感知スヘキ變化ヲ及ホスモノニ非スト思考セラ

ル。

第一ハ現存條約ニテ清國ニ設ケラレシ現状ヲ何等侵害セサル故、露國ハ之レニ異議ナシ。

第二ハ現紛擾ノ初メ以來清國ノ保全維持ヲ其政策ノ根本原則ト提唱セル露國ノ意思ニ合致ス。

第三ニ豫見セルカ如キ事態ハ、八月二十五日ノ廻章ニ於テ述ヘタルカ如ク、露國ヲシテ事情ニ從ヒ其態度ヲ變更スルノ已ヲ得サルニ至ラシムヘシトスル宣言ヲ、玆ニ再言セシムルモノナリ。

第四ニ關シテハ何等ノ評釋ヲ要セス。

#### 獨 宰 相 ノ 滿 洲 除 外 聲 明

以上ハ皆明治三十三年十月中ノ出來事タカ、翌三十四年三月十五日獨國宰相ハ議會テ、英獨協定ハ滿洲ニ適用サレヌ、此事ハ協定締結當時明カニ了解セラレタ所タト聲明シタノテ、加藤外務大臣ハ直チニ在英林公使ニ電報シテ、左ノ質問ヲ英國政府ニ爲ス様訓令シタ。

日本政府力英獨協定ノ主義ヲ容認スヘシトノ誘招ヲ受ケタル當時ノ該協定ハ、其文面上清帝國全部ニ適用

スヘキモノナルコトハ明白ナリシナリ、日本政府ハ之レヲ容認スルニ先チ、日本カ該協定ノ主義ヲ容認スルトキハ、該協定ニ關シテハ日本ハ贊同國タルニ代ヘ締約國タルニ於テ占ムヘキ同様ノ地位ニ立ツモノナル旨ノ保證ヲ兩締約國ヨリ受領セリ、依之日本政府ハ無制限ニ同協定ニ贊同ヲ與ヘ、而シテ爾後其條項ヲ誠實ニ保持シタリ。

萬一「フオン、ビュロー」伯ノ陳述ハ誤報ナラストセハ、同協定ノ範圍外ニ置カレタルコトト斷定セサルヲ得ス、右ノ事情ナルニ依リ英獨協定ハ原締約國間ニ或方法ノ下ニ其明文ニ依リ公平ニ推斷シ得ルヨリハ一般ノ適用ヲ減殺セラレタルモノナリヤ、通報ニ接センコトハ日本政府ノ希望スル所ナリ。

右ニ對スル英國政府ノ回答ハ左ノ通りテアル。

- 一、英獨協定中或章句ノ解釋ニ疑義起リタルカ如シ。
- 二、同協定第二條即チ兩國政府カ其政策ヲ清帝國ノ領土的狀態ヲ減損セスシテ維持スルノ方法ニ指導スヘキコトヲ誓約スル條ハ、英國皇帝陛下ノ政府ニ意見ニテハ、之レヲ滿洲諸省ニモ適用スヘキモノトス。
- 三、然レトモ英國皇帝陛下ノ政府ハ右第二條ヲ如何ニ他國政府カ解釋スルカヲ責任ヲ以テ言明スル能ハス。

四、獨逸政府ハ頃日英國皇帝陛下ノ政府ニ通知スルニ、同國政府ハ北京駐劄獨逸公使ニ訓令シ、清國政府ニ對シテ左ノ如ク通知セシムル旨ヲ以テセリ。

獨逸政府ノ意見ニテハ清國ハ其列國ニ對シテ負フ所ノ責務ヲ計量スルヲ得ル迄、且ハ這般ノ責務ヲ應諾

スル迄ハ領土的并ニ財政的性質ヲ帶ヒタル條約ヲ、何レノ國トモ締結スヘカラサルナリ。

右ト同様ノ質問ニ對シテ其時獨逸外務大臣ノ臨時代理ヲシテ居タ外務次官ハ井上公使ニ向ヒ、日本政府ノ間ヒニ對シ英國政府カ滿洲ヲモ含ムト返事シタトノコトヲ、倫敦カラ聞テ非常ニ驚イタ、協定談判ノ當時英國政府ハ滿洲ヲ除外スル一項ヲ協定中ニ加ヘルコトヲ提議シタカ、獨逸政府ノ勸告ニ依リ「其勢力ヲ及ホシ得ル限り」ト云フ字句ヲ挿入シテ之レニ代ヘタコトヲ確カニ記憶シテ居ル、ト語ツタ由テアル、之レハ三月二十八日ノ事タカ、同シ日ニ英國上院テ外相「ランズダウン」侯ハ左ノ陳述ヲシテ居ル。

英獨協定談判ノ間ニ於テ、獨逸政府ハ滿洲ハ之レカ勢力ノ及フ場所ニ非ス、故ニ其第一條ハ獨逸ノ關スル限りニ於テハ滿洲ヲ包含セサルコトヲ英國政府ニ暗示シタリ、其第二條ハ何等ノ制限ナキモノナレハ、此條項ハ清國ノ全部ニ適用セラレ、隨テ滿洲ニモ適用ヒラルモノトス、獨逸政府ノ解釋ハ如何トスルモ英國政府ノ意見ハ實ニ斯クノ如キナリ。

#### 當時清國ノ事態ト日本—獨逸ノ行動

英獨協定ノ解釋ニ關シ獨逸ノ解釋カ是カ或ハ英國ノ主張カ否カト云フ問題ハ追テ研究スルコトトシ、茲ニハ其當時ニ於ケル清國ノ事態ヲ瞥見シテ、獨逸宰相カ何故ニ三月十五日ノ聲明ヲシタカノ動機ヲ溫ネント思フ。前ニ述ヘタ北清事變ヲ動機トスル對滿交渉ノ月日ヲ辿レハ、明治三十四年三四月ノ交日露關係カ頗ル切通シテ居タコトハ自ラ了解出來ルカ、更ニ之レヲ明カニスル爲當時ノ往復電報中テ最も重要性アルモノ數通

ヲ左ニ掲ケル。

在獨井上公使ヨリ加藤外務大臣宛

三月六日獨國外務次官ト内密ノ會見ヲ遂ケタルニ、同次官ハ豫テ外務大臣ト熟議ヲ經タルモノト見ヘタルカ、其本公使ニ語リタル所左ノ如シ。

獨國政府ハ既ニ屢次聲明シタルカ如ク、何レノ國タルヲ問ハス現下ノ時局ヲ利用シテ、何等特別ノ利便ヲ取得スルヲ以テ不正事ト認ムカ故ニ、滿洲ニ關スル露國ノ行動ハ全然否認ス。

同次官ハ極東ノ事件ニ關シテ獨、露兩國間ニ何等秘密協約ノ成立セルモノナキヲ斷定シ、且本使ニ確保スルニ獨國政府ハ滿洲問題ノ日本ニ取リテ重大事件ナルコトヲ熟知スルカ故ニ、事件危機ニ迫ルノ場合ニ及ヘハ、獨國政府ハ好意中立ヲ守ルヘシ、獨國ニシテ這般ノ態度ヲ取ルニ於テハ、佛國ノ艦隊ハ爲ニ牽制セラルヘク、而シテ英國ハ多分日本ヲ支持スヘキニ依リ、日本ハ海陸兩方面ニ於テ強固ナルコトヲ得ヘシトノ事ヲ以テセリ。

加藤外務大臣ヨリ在英林公使宛

貴官ハ英國ノ外務大臣ニ面會ヲ求メ、貴官ノ言ハムトスル所ハ最モ個人的且内密的ニ屬スルモノナルコトヲ、同大臣ニ知了セシメタル後ニ於テ、三月六日獨國外務次官ノ在獨井上公使ニ對シテ爲シタル注意ノ要領ヲ同大臣ニ通告セラルヘシ、然ル後貴官ハ「ランズダウン」侯ニ質問セラルヘキハ

第一、英國政府ハ獨國外務次官ノ注意ノ件ニ關シ獨國ヨリ協議ヲ受ケタリヤ。

第二、日本ニ於テ露國ニ交渉ヲ必要トスル場合ニハ、日本ハ何程迄英國ノ援助ニ依頼シ得ヘキヤ。

第三、同大臣ノ意見ニテハ獨國外務次官ノ注意ヲ以テ獨國ノ眞實ナル態度ニシテ且最終ノ意向ヲ表面スル

モノト爲スヤ。

在英林公使ヨリ加藤外務大臣宛

本官ハ三月十日「ランズダウン」侯ヲ訪問シタルニ、同侯ハ左ノ意味ヲ以テ回答シタリ。

第一問ニ就テハ英國政府ハ獨國ヨリ協議ヲ受ケタルコトナシト雖モ、在英獨國代理大使カ同侯ニ語リタル所ハ、曩ニ獨國外務次官カ井上公使ニ告ケタルト同一ノ意味ナリシナリ、然レトモ同侯ハ獨國カ如何ニシテ佛國ノ艦隊ヲ牽制シ得ヘキヤ、又好意中立トハ如何ナルコトヲ意味スルヤヲ知ラスト云ヘリ。

第二問ニ付テハ英國ハ南阿ニ事アルニ依リ、嚴正中立ヲ守ルノ外何等ノ幫助ヲモ與フルヲ得ス。

第三問ニ付テハ同侯ハ獨國究極ノ意志ニ關シ何等確實ノ事ヲ言明スル能ハスト雖モ、同侯ノ意見トシテ將タ獨國代理大使ノ話調ヨリ同侯カ推量シタル所ニ依レハ、滿洲問題ニ於ケル獨國ノ關係ハ甚タ深カラサルニ依リ、獨國ハ此問題ノ爲メニ露國ニ對シテ宣戰スルカ如キコト無カルヘシ、同代理大使ノ話調ハ深く同侯ノ腦裏ニ、獨國ハ嚴正中立ヲ守ルナルヘシトノ印象ヲ與ヘタリ、依テ同侯ハ獨國ノ究極ノ態度ハ多分嚴正中立ナルヘシト思料ス。

在英林公使ヨリ加藤外務大臣宛

三月十六日「ランズダウン」侯本使ニ告ケテ曰ク

獨國外務大臣カ獨國駐劄英國大使ニ答ヘタル所ニ依レハ、好意中立トハ嚴正中立ノ意味ニシテ、而カモ佛獨戰爭ニ於テ英國ノ守リタル中立、并ニ南阿戰爭ニ於テ獨國ノ守リタル中立ヨリ一層嚴正ナルモノナリト云ヘリ、又獨國外務次官ハ戰爭ノ場合ニ於テハ佛國艦隊ハ獨國艦隊ノ行動ニ遵由スルナルヘシト云ヘリ、而シテ同大臣ハ更ニ附言シテ、尤モ露國ハ本件ヲ極度迄押通スコトナカルヘシト云ヘリト。

英國外務大臣ハ獨國外務大臣談話ノ後節ニ付テハ、何事ヲモ云フ能ハスト雖モ、唯其云フ所ニ依テ其意ヲ取ルヘキノミト云ヘリ。

次テ外務次官補「バーチー」氏ト會談セルニ、同氏ハ獨國ハ日本ヲ懲慝シテ露國ト開戦セシメ、自國ハ傍觀者トシテ其經過ヲ注視セントスルモノノ如シト云ヘリ。

以上ニ依ツテ明治三十四年ノ春ニ於ケル日本當局ノ氣分ヲ窺ヒ知ルコトカ出來ルト共ニ、獨逸カ日本ニモ亦露國ニモ均シク良イ子ニナラムト試ミタ底意カ分ルコトト思フカ、三月十五日宰相ノ聲明ハ相當英國ノ氣ヲ惡クシタノテ、其歡心ヲモ同時ニ購ハンカ爲、三月十八日獨逸外相ハ左ノ訓電ヲ其在露大使ニ發シタ。

獨逸ハ滿洲カ英獨協定ノ範圍外タト聲明シタ、此態度ハ露國ニ好意ヲ示シタモノテ、露國カラモ亦同様ノ返報ノ在ルノヲ期待シテ居ル、其問題ハ天津ニ於ケル英ノ鐵道テ、會社ノ土地カ露西亞ノ居留地内ニ包含セラレタノテ、英國カラ獨逸ニ支持ヲ頼ンテ來タ、此鐵道ニハ獨逸モ資金上大關係カ在ル、若シ露國カ英國ト戰ヘハ米國之レニ加ハルヘク、露國ハ列國ノ共同以外ニ立タヌト聲明シタカ、此爭ノ結果ハ共同ノ敵ヲ作ルモノテアル。

## 日本ノ失望

日本カ英獨協定ノ主義承認ノ勸誘ニ對シ、自ラ進ンテ之レニ加入シタ事ハ既ニ述ヘタ、此加入ニ依ツテ原締約國ト同一ノ地位ニ置カレタ日本ハ、清國領土ノ保全ヲ侵害セントスル露國ノ滿洲政策ニ抗爭スル爲、協約第三條ヲ援用シテ英獨二國ノ協力ヲ期待シ得ルモノト考ヘ、從來ノ孤立カラ幾分テモ脱却シ得タノニ満足シテ居タ矢先キテアルカラ、獨逸宰相ノ爲シタ聲明ハ實ニ我國ニ取ツテ晴天ノ霹靂ヲ在ツタ、然ラハ英獨協定ハ全部滿洲ニ無關係タトスル獨逸ノ見解カ果シテ正當カ、或ハ又滿洲除外ハ第一條ノミニ關ストノ英國ノ主張カ正シイカ、此斷定ヲ公平ニ下ス爲メニハ、如何ナル動機、如何ナル目的テ、獨逸カ協定ノ締結ヲ英國ニ申込ンタカト云フ根源ヲ窮メルノカ一番必要テアル。

## 獨逸カ協定ヲ提議セル動機

獨逸ハ久シイ前カラ揚子江ノ流域ヲ英國ニ獨占サレルノヲ恐レテ居タカ、正面カラ之レニ對抗スルコトカ出來ヌノテ、該地域ヲ中立トスルノ考案ヲ立テ、既ニ明治三十年ノ暮ニ露國ヲ懲慝シテ、之レカ提議ヲサセ様ト試ミタコトカアル、北清事變ハ上海ヲ列國軍隊ノ駐屯地ト爲シ、英兵ノ數ハ二千五百ニ達シ、其軍艦モ多數入港シテ、揚子江ハ恰モ英國ノ監視下ニ置カレタ様ナ事態ト成ツタカラ、獨逸ハ角立タヌ方法テ英國ノ獨占ヲ阻止セント欲シ、思ヒ付タノカ同江流域ノ門戶開放、機會均等テアル、併シ地方ヲ限ツテハ英國ノ氣

受ケモ善クナイニ定マツテ居ルカラ、明治三十三年六月十四日獨逸側カラ英國ニ切り出シタ第一回提議ニハ廣ク清國ノ領土保全、門戶解放ト述タズケテ、此二原則ヲ基礎トシテ英國ト友交的協調ニ達シ得タラ。清國ニ於ケル兩國通商關係ノ増進ニ資スルコトカ尠ク無イタラウ、ト云フ頗ル廣漠ナ様式ヲ用ヒタ。越エテ八月二十二日「ウキルヘルムスヘー」ニ英國皇太子カ獨帝ヲ訪問シタ時、「カイザー」ハ英國カ楊子江流域テ他國ノ負擔ニ於テ商權ヲ獨占シハセヌカト一般ニ危惧ノ念ヲ懷テ居ルカラ、門戶開放ヲ保障スルノカ得策タ、獨逸ハ此考案ヲ支持シ之レカ爲協定ヲ結フヲ辭セヌ、ト述ヘタカ英國側カラ其後一向ニ反應カ無イノテ「フオン、ビュロー」伯ハ英國大使ニ對シ、「カイザー」ハ支那問題ニ關スル其提議ノ返事ヲ大ナル興味ヲ持ツテ待ツテ居ル、獨英兩國カ楊子江問題ニ付協定ニ達シ得レハ、之レハ甚タ緣起ヨキ先例ト成ルタラウト言ヒ送ツタ。此報告ニ接シタ英國外相ハ獨帝提言ノ意義ヲ明確ニセンコトヲ求メタカラ、獨逸外務大臣ハ其在英大使ニ宛テ、楊子江流域ニ於ケル交通ノ自由ト通商ノ自由ト共同シテ維持シ、之レヲ保護セントスルノ趣旨ヲアル、此事ハ佛、米、日ニモ申入レル筈タカ、露國ハ楊子江ニ關シ頗ル無關心ノ態度ヲ示シテ居テ、從ツテ其返事ハ爾餘ノ諸國ニ不満足タト思ハレルカラ、露國ニハ申入レヌ積リタト附ケ加ヘタ、然ルニ「フオン、ハッツフェルト」大使ハ佛、米、日ニ獨逸カラ開談スルコトハ英國ノ機嫌ヲ損フト思フカラ、獨英二國テ先ツ協定ヲ作り、之レヲ三國ニ示シテ加盟ヲ求ムル方カ善イトノ意見ヲ述ヘ、又英國ノ意嚮ハ楊子江ノ流域ノ門戶解放政策ヲ互ニ支持シ、清國現下ノ動亂ヲ利用シテ領土上慾望ヲ求メヌコトヲ協定セントスルニ在ルモノノ如ク、尤モ「オーブン、ドア」ボリシー」ノ語ハ意義カ明確テ無イカラ他ノ字句ノ使用

ヲ希望シテ居ル、ト報告シタ。獨逸外務省ハ右ノ意見ヲ斟酌シテ協定原案ヲ起草シ、九月二十二日之レヲ駐英大使ニ送ツタ、其要領ハ左ノ通りテ在ル。

一、楊子江、其支流及流域ヲ何等ノ差別ナク諸國民ノ經濟通商ニ對シ自由開放シ置クハ、列國ニ共通スル永久ノ利益ナリ、此利益ハ又共同シテ且永久ニ保護セラルヘシ。

二、獨英兩國政府ハ現下ノ紛擾ヲ利用シテ、清國版圖内ニ於テ何等領土上ノ利益ヲ獲得セサルヘシ。

三、他ノ列國ニテ形式ノ如何ニ拘ラス領土上ノ利益ヲ獲得セムトスルトキハ、而シテ獨逸又ハ英吉利政府カ何レカノ土地取得ヲ必要ト認メハ、兩國政府ハ豫メ之レニ關シ協定スヘシ。

支那ニ利害ヲ利スル諸國、殊ニ佛、露、米、日ニ一及二ノ承認方ヲ申入レル爲、此事ヲ前條又ハ一項トシテ附記スルコト。

楊子江ニ於ケル獨逸商業ノ自由ハ充分確保スルヲ要スルモ他方之レカ爲ニ露國ニ反對スルモノトシテ解セラレヌ様充分注意スルヲ要ス。

一、ハ「オーブン、ドア」ニ關スル「ソールスベリー」卿ノ疑義ヲ之レニ依リテ解決セル積リナリ。

二、ハ獨逸ニ取り今ハ單ニ楊子江ニ關シ其重要性ヲ有スルヲ要ス、尤モ之レヲ一般保障トスルコトカ商議ヲ容易ニスルコトモ在リ得ヘシ。

三、ハ具體的事件ニ關シ、保障條項タル爲ナリ。

## 交渉ノ内容

右ノ獨逸案ヲ基礎トシテ獨逸大使ハ英國外相ト九月二十五日會商シタ。一ニ付英國外相ハ楊子江城ノミニ通商自由ノ聲明ヲ爲ストキハ、清國ノ他ノ地方ハ門戸開放ヲ要セスト、推斷セラルル虞アル故、廣ク清國ノ諸河川、海岸ノ諸港ト規定センコトヲ主張シタ、獨逸大使之レニ答ヘテ、獨逸ハ支那ニ於テ露國ト爭フヲ欲セヌカラ、右ノ様式テハ露國ノ對滿政策ニ影響スルシ又滿洲ハ楊子江城ノ様ニ商業關係カ大キクナイト指摘シタ、英國外相ハ自分ノ修正案モ露國ノ利益ヲ害セント欲スルモノテハ無イ、露國ノ滿洲ニ於ケル關係ハ内地ノ事タカラ諸港トハ聯繫カ無ク、又滿洲ノ海岸港ハ開港場テ、強テ求ムレハ黑龍江ニ在ル港ニ影響スルカモ知レヌカ、然ラハ之レヲ除クト明記スレハ善カラント反駁シ、一ニ對スル其修正ハ協議成立ノ必須條件タト附言シタカ、十月二日正式ニ提出シタ英國修正案ハ左ノ通りテ在ル

一、清國ノ河川及沿海ノ諸港ヲ何國ノ差別ナク、總テ其國ノ貿易及其他ノ正當ノ經濟的活動ニ對シ、自由開放シ置クハ、列國ニ共通スル永久ノ利益ナリ、兩國ハ北緯三十八度以南ノ清國諸地方ニ以上ノ主義ヲ助長スルニ一致ス。

二、英獨兩國政府ハ現下ノ紛擾ヲ利用シテ、清國版圖内ニ何等領土上ノ利益ヲ獲得セサルヘク、且ツ同様に獲得ヲ爲サント企ツル一切ノ國ニ對シ、兩國間ニ協定セラルヘキ手段方法ニテ反對スヘシ。

三、他ノ列國ニ於テ形式ノ如何ニ拘ラス前項ノ領土取得ヲ目論ミ、英獨兩國政府ノ一カ又領土取得ノ必要

ヲ認メタルトキハ、兩國政府ハ此點ニ關シ豫メ協定ヲ遂クヘシ。

然ルニ黑龍江ノ諸港及旅順口ヲ除外セントスル獨逸ノ主張ニ、地名ヲ掲ケスニ對應スル爲案出シタ北緯三八度以南云々ノ文句ハ、除外地中ニ天津ヤ營口ヲ含ムコトト成リ、英國ノ通商ニ重大ナ關係アルコトヲ發見シタ、偶々獨逸側テハ二ノ後段ニ代ヘルニ「兩國ノ政府ハ清國ノ領土保全ヲ目標トス」ヲ以テセンコトヲ申出タカラ、此修正ハ條項ノ力ヲ減殺シ期待スル保護ヲ縮少ストノ理由テ「現行條約ニ依リ清國ノ如何ナル部分ニ於テモ兩國ノ一方カ享有スル權利ハ、本協定ノ爲何等減少シ又ハ影響ヲ受クルモノニ非ス」トノ一條ヲ追加センコトヲ、「ソールスベリー」外相カラ提議シタカ、其後北緯三十八度以南云々ノ字句ニ對シテハ英國閣員中カラ反對意見カ出テ、又獨逸大使ト折衝ヲ重ネタ末既得權ノ問題ハ協定前文ニ掲ケルコトニ折合ヒ、緯度ノ代ハリニ「其勢力ヲ及ホシ得ル限り」ノ文言ヲ使用シ、又二ノ後段ノ義務ヲ緩和シ、三ノ侵略的

字句ヲ修正シテ出來上ツタノカ十月十六日ノ協定テ在ル。

## 獨英兩國ノ協定解釋相異ノ根源

以上テ明カナ通り獨逸カ本協定ノ締結ヲ英國ニ提議シタ目的ハ、門戸開放、機會均等ノ旗幟ニ隱レテ、英國カ楊子江流域ヲ獨占スルノニ豫メ備ヘントシタモノテ、此地方以外ノ事迄取極メ様トノ考ハ少シモ無ツタノテアルカ、獨逸ノ提議ニ接シタ英國ハ之レヲ活用シテ、北清ニ於ケル露國ノ企圖ヲ牽制セント欲シ、萬事カ此見地カラ出發シテ居ルノタカラ、初メカラ本協定ニ對スル獨英兩國ノ見方ハ非常ナ相違テ、第一條ニ關

スル獨逸提案ト英國最初ノ主張トヲ比較スレハ、明瞭ニ判ルコトアルカ、第一條ニ滿洲除外ヲ強ク主張シタ獨逸ハ第二條ニ關シテ一度モ同様ノ問題ヲ起シタコトカ無イ、又英國モ少シモ之レニ觸レテ居ラヌ、即チ第二條ノ規定カ滿洲ニモ適用サレルヤ否ヤト云フ問題ハ協定談判中双方カラ一遍モ口ニ出シタコトカ無イノテアル、ソシテ獨逸側テハ自分ノ考ヘ通り第二條モ第一條ノ引續キテ、第一條ノ地域制限ハ當然第二條ニモ及フモノト解釋シテ來タ様タカ、元來根本的ニ違ツテ居ル意思ヲ淡白ニ寧ロ故意ニ打明ケ合ハスニ條文ヲ作ツタノタカラ、後日其解釋カ一致セヌハ無理モ無イコトテ、「ソールスベリー」卿サヘ協定商議中「ハッツフェルト」大使ニ對シテ、獨逸カ露國ノ氣ニ入ル爲ニ協定ヲ修正シテヨリ以來、自分ハ本協定ニ餘リ興味ヲ感シナク成ツタコトヲ告白スル、此協定ハ種々ノ誤解ヲ生シ得ルタロウト云フテ居ル位タ。然シ今假リニ獨逸ノ主張解釋ハ全クノ善意カラ出テ居ルモノトシテ、若シ北緯三十八度以北ノ地方ヲ除外シヨウト云フ十月二日ノ「ソールスベリー」卿ノ提議カ成立シテ居タラ、第一條ノ此制限ハ矢張り第二條ニモ及フモノトシテ、獨逸ハ北京ヤ直隸省ノ大部分乃至蒙古全部ヲ勝手ニスルコトヲ露國ニ許ス積リテ在ツタノタロウカ、此緯度ニ依ツテ除外地域ヲ定メントスル英國外相ノ提議ハ、獨逸外相カ在英大使ニ十月三日發送シタ電信テ之レヲ承諾シタノテアル、然ルニ同月七日「ワルデルゼー」元帥カ「カイザー」ニ發電シテ、露國ハ直隸ヲ其單獨ノ勢力圈トシ、黃河ヲ境トスルコトニハ曩ニ獨逸ト協定カ在ルカラ、獨逸トノ話シ合ヒハ困難ヲ無カロウトノ話カアツタト報告シタ、此電信ノ一隅ニ、「カイザー」ハ自筆テ「之レハ到底問題ト成ラス、露國ハ常ニ此協定ノ事ヲ云フカ、自分ハ少シモ知ラヌ、之レハ一ツノ野蠻ナ大膽テ在ル、今ヤ支那分割ノ提議ヲ爲ス、余

ハ同意スル能ハス」ト書イテ居ルカ、此「カイザー」ノ意見ト獨逸政府第二條ノ解釋トヲ如何ニシタラ融合スルコトカ出來ルテアロウカ、偶々第一條ノ制限カ頗ル漠然タル字句ニ改メラレタカラ、宰相ノ議會聲明モ出來タ譯テ心證ハ獨逸ニ對シテ甚タ有利テナイ、ソシテ「カイザー」カ重要政務ヲ悉ク親裁シテ居タノハ人ノ皆知ル所テアル。

## 獨逸ノ政策批判

要スルニ「カイザー」ノ遣リ口ハ餘リニ權謀ニ富ミ過キ、又餘リニ利己主義ヲ發露シ過キテ居ル、此批評ニ對シテ今日世界ノ輿論ハ舉テ同感タト思フカ、「カイザー」ハ三國干涉ヲシタ直後ノ明治二十八年七月三十日ニ、日露兩國ハ戰爭スルコトト思フカ、双方ノ用意カ整フ迄ニハ未タ相當ノ時カ在ルタロウト云フテ居ル位タカラ、早晚日露ノ二國ハ滿韓問題テ衝突スルニ違ヒナイ、英國ハ日本ニ味方シテ佛國ヲ牽制スルタロウカラ、傍觀シテサヘ居レハ獨逸ハ極東ヲ其商權ヲ擴大シ、又歐洲ヲ其東方國境ノ脅威ヲ減少シ得ト考エルノハ勿論テ、明治三十四年ノ春日本ニ好意中立ノ態度ヲ表明シナカラ、間モ無ク踵ヲ翻スカ如ク好意中立トハ嚴正中立ノコトタト強辯シテ耻チス、英國ニハ日本ト聯合シテ露國ヲ擊テト盛ニ喉ケナカラ、他方露國ニ對シテハ英獨協定ノ滿洲除外ヲ聲明スル等、其歡心ヲ購フヲ怠ラス、日英同盟商議ノ際ニハ最初一見主動的態度ヲ執リシニ拘ラス、日露戰爭中ニハ露國ト同盟談判ヲ開ク等、極端ナ獨逸本位カラ見レハ理窟ハ在ルコトタロウカ、此様ニ露骨テ他國ヲ踏ミ付ケタ仕方ハ、決シテ世ノ信賴ヲ博スル所以テハ無イノテ、世界戰爭

ハ雄辯ニ之レヲ物語ツテ居ル。

日英同盟協約ニ所謂清帝國

是レニ付テ想ヒ出スノハ日英同盟協約商議ノ際最初英國カラ出シタ前文案中ニハ、單ニ清國（チャイナ）ト書テ在ツタノヲ、我國カラ清帝國（エンバイヤー、オフ、チャイナ）ト修正シ、之レニ依ツテ英獨協定テ起ツタ様ナ強辯ヲスル餘地ヲ封シタ、ト頗ル得意ヲ在ツタ我先輩諸氏ノ面影テアル。此修正ハ明治三十四年十二月十二日ニ我方カラ提出サレタモノタカ、當時歐洲ニ居タ伊藤侯カラ桂首相ニ此修正ノ必要ヲ指摘シタ電報カ、十二月六日ニ出テ居ル、隨分文句ニ捕ハレタ話テ、此種小理窟ニ拘泥シテ徒ラニ議論スルヲ好ム弊カ今日益々甚クシクナツタ様タカラ一言スルノタカ、原來英獨協定ノ效力ノ及フ範圍カ爭ヒト成ツタノハ、前ニモ述ヘタ様ニ「其勢力ヲ及ホシ得ル限り」ト云フ文句カ第二條以下ニモ影響スルカトウカト云フ問題テ在ルノニ反シ、日英同盟ハ專ラ滿韓ヲ目標トシテ居ルノタカラ、清國ト書コウカ清帝國ト書コウカ、何等解釋上ノ差異ヤ誤解ヲ生スル餘地ハ無イ筈テアル、若シ清國ト書イタ爲ニ強辯サレル位ノ同盟テ在ツタラ、其時ハ既ニ同盟其物ニ縛カ入ツタノテ、最早文句等ノ問題テハ無イコトヲ先ツ自覺セネハナラス。

條約ニ加入時ノ注意

序テニ附言シタイノハ、我國カ勇ンテ英獨協約ニ加入シタ眼目ハ、之レヲ露國侵略政策ノ對抗具ニ供シヨ

ウト考エタカラタカ、其爲ニ援用スヘキ條項ハ第二條テ第三條テハ無イ、然ルニ第二條ノ後段ハ獨逸ノ要求テ協戮策動ノ義務カ殆ント無クナツタカラ、我國ヲ満足サセ得ヌコト勿論テ、若シ第三條ヲ基礎トシテ協力ヲ求メタナラハ、獨逸ノミナラス英國カラモ本條ハ他國ノ行動ヲ阻止スルヲ目的トスル規定テハ無ク、他國ノ獲得スル利益ニ比例シテ自國利益ノ伸張ヲ計ルヲ目標トスルモノタト嘲笑的ナ回答ニ接シタクロウ、前ニ掲ケタ露國ノ回答振ニ徴スルニ、露國テハ我國ヨリモ餘程良ク協定ノ消息ニ通シテ居タコトカ分ルカ、何レニセヨ滿洲除外ハ假令第一條丈ケテアルトシテモ、此協定ハ決シテ當時我當局ノ考ヘテ居タ様ナ效果ヲ齎ラスモノテハ無ツタノテアル。以上ハ自國カ商議ニ關係シナカツタ條約ニ加入スルニ當リ、幾何ノ注意ヲ拂ハネハナラスカト云フ實際ノ教訓ヲ與ヘタモノテ、我國ニ取リ頗ル貴重且有益ナ經驗テ在ツタト思フ。